

## 【翻 訳】

## アランをたたえて

フラマン女史によって集められた

アレクサンドル女史の語録

(\*)

神 谷 幹 夫 訳

一九七八年十月、あるすばらしい秋の日に、ジャンヌ・アレクサンドルは、ウヌーの大きなマロニエの陰に座って、突然、私にいった。「私がアランから理解したすべてのことを、これからあなたに言います。よかったらメモを取ってください。始めます。『思想家アラン』」。

そして女史は、一時間以上にわたってこの主題を展開した。素早く書き留めたメモはつぎの通りである。

## 思想家 アラン

アランは思想に〈回心した〉者である。アランには思想との出会い——神との出会いのような——があった、その照明があった。

『わが思索のあと』(二二五頁)のなかでかれ自身が主張していることから、いつも出発すること。

「私はミシユレ校に入った……。ジュール・ラニョーとの出会い、そして啓示」。「私は一人の思想家を知った。私がかれに驚嘆し、かれにならおうと決心した」。

このことはアランの格率、変わらぬ生活規律を定義している。かれはかれの生の最も密かなもの、発見

すべきものを語っている。なぜというに、かれはそれを決して自慢しようとしたり熱望しようとはしなかったからである。それはかれの存在を、根底においてあつたように、物語っている。

外見上、いつさいの形而上学を拒否しているかれは、「私は解けない問題にはどんな興味もたない」、直ちに、いつも根本的形而上学のなかにいるのである。すなわち考ええるとはなにか。精神であるとはなにか。われわれはここではなにもわかつていないのだ。これはすべての中心である。アランは思想が宇宙から切り離すことのできない、世界の一部分であることを発見した。そしてこの照明は、「私を決定的に変えた」と、かれはいう。このイデーを、私は拒否しようとしたが（唯物論者であるのはきわめて心地いい）、できなかった。そしてそれは私を決定的に変えた。この驚きと絶えざる困難を、かれは、堂々と明言した。すなわち信仰告白したのである。「私はそこからほとんど動かなかつた。この発見については、私はそれに慣れることもできなければ、親しむことも信じていることさえもできなかった。（ひとつの発見——発見することしか、再発見することしかできないもの）」。

かれのすべての哲学がここにある。かれのすべての態度、すべての作品はこれにたいする誠実さである。

### 第一の確実性

思想は人間の存在から、その全体において、切り離すこともできなければ、また具体的人間性から切り離すこともできないことの確実さ。すなわち現実から切り離された、そして窮極において存在の全体から切り離された、すべての思想は何ものでもない。これはすべての人間（子ども）にとって出発点である。かれを専門の哲学者たちから区別する深い主張である。すなわちほんとうの思想は、共通の思想であり、日々、思想、万人の思想である。いずれにせよ、この基礎から出発して、思想を問い、理解し、その深みと無限性において発見しなければならぬ。

抽象的に考えること、現実から切り離されることの拒否。

直接の具体的なものからリアルに考えようとする賭け。すなわち自己を純粹なもの、離れているものと主張する精神の体系によつて真理を曲げないための不可欠な条件。

そこから、アランは、だれよりも以上に、深くカント主義者である。「直観のない概念はむなししい」。したがつてかれは、ヘーゲルやライブニッツの膨大な体系、および世界の第一動因なる神観念などを遠ざけるのである。それはかれにとつて、あまりに容易な思想である。

思想は行動(アクト)のなか、共通の思考のなかにある。諸学者たち、専門の哲学者、思想の大家、エリートたちとの深い分離。すべての人は自己のうちに思想をもっている。アランは共通の思想に触れることを望んだのである。

人間は、もつとも受動的な者でさえも、絶えず考えることによつてしか生きることができない。知覚するため、判断するため、法に従うため、感覺するためにさえも——。絶えず具体的な直観に依つて考えることは、思想を犠牲にすることではまづたくない。それは反対に、ほんとうに考えるための正しい道である。それは犠牲のように見えるが、しかし……。「新聞の小記事を形而上学の水準に高める」ようにせねばならない。個々の思想のなかにいつさいの思想があることを知ること。

考えることは、人間にとつて、信じがたい力を段々量ることのできる、驚くべき特権である。そしてこの思想は、在るか無いか、である。この思想をもつとき、人はいつさいの思想をもつのである。驚くべき、不断の発見。

## 第二の確実性

この思想は、物質的存在とは別の秩序に属する。物質や事物とは別の秩序に属する。二元論は根源的であり構造的である。空間を構成する力、すべてのものを〈関連づける〉力(プラトンの観念)。アランの定式、「終わるところから始まる」は、全体性を要請する精神の力を示している。意識はすべてのものを包含し、

何ひとつ意識から逃れ出るものはない。そして同時に、全体を表象する意識は、全体がいつも超えていることを覚知する。

したがって思想は、始めに、無限のものとして、すなわち世界とは矛盾するものとして立ち現れる。それはもう一つの秩序である。精神を表象するために「選ばねばならない」——精神を物質とはまったく異質なものと位置づけるために。人間は「魂と身体との結合」である。一方がなければ他方ははたらかないのであるから。また他方において、対象なしに考えることは無である。それは考えているように見えるだけである。

人間は身体を離れて考えられない。人間は世界を離れて考えられない。

二つの相関概念、思想と物質。思想はまったく身体でないもの、世界に場所をもたないもの、永遠の不在である。精神は触れることができない（魔女や魔術師などの主張）。この区別をリアルにいうのは至難のわざである。想像についてのアランの深い省察がここにある。想像——思想とそれの正反対のものとの混同、思想が考える対象との混同。そこからまた、かれの本質的にメタファ—な言語についての探求がある。そしてそこから、また、いつも事例について考えるという法が課されたのである。思想行為においては、このラディカルに区別された二つの秩序をけつして切り離さないこと。

### 第三の確実性

こうしてアランの方法と思想のもつとも深い原理に至る。それはもう一つの仕方でかれの最初の信仰告白、「ひとつの発見——発見することしか、再発見することしかできないもの」を繰り返す。思想はけつして停止しない、窮極のものではない。精神が制約され、限られた表象のなかに閉じ込められるや否や、精神が実在をとらえたと主張し、それに満足するや否や、思想は失われる。

宗教的ともいえる、啓示から生まれたこの思想への召命——人間の固有性は考えることであるという確信。

そこにアランのいつさいの知性的態度の中心がある。またかれはけつしてそうは言わなかったけれども、そこにはかれの生活実践の中心がある。それを言える者はだれもいないけれども、そこまで深く考えないと、何も理解できない。すなわちアランは修道僧が神に帰依することく、思想に宗教的に帰依した。かれは「思想のなかに入信した」のである。かれは絶対的思想家であろうとしている。

そこから、いくつかの結論を挙げることができる。

### 第一の結論

この思想への召命は貧しさにたいする一種の決意を含んでいる。もつとも厳しく、もつとも謙虚にその天職をまっとうすることによって、かれは普通の人生を生きようと決心した。かれのうちにはさまざまな思いがあつた。それは容易に見抜くことができる。が、それにもかかわらず、かれはこの道を選んだ。そしてそれを隠さなかつた。「お金は獣となる……」。「私は金の餌壺には行かないだろう」。禁欲主義の原理からではない。もし自分を失うことなくお金を得ることができれば、結構なことだが……。もし私が正直で富者となろうとするならば、結構なことだが……。でも私は否である。問題はもつとも正しく考えるため、もつともよい生を選ぶことであつて、自分自身に禁欲主義を課すことではない。富者となることを考えると、人はそのことしか考えない。人は二人の師に同時に仕えることはできない。そこから、かれは正直な労働者である小学校教諭を高く評価。そしていつさいの大学への野心を拒否し、高等教育に留どまろうとする。世間および社交界の出来事との明白な分離。戦前、すでに、かれはありえないタイプと見なされている。「メタフィジック・エ・モラル」誌への貢献は、かれを際立たせることができたろうが、アランは自分の名をサインしなかつた。戦後さらにまた、哲学界との関係を断ち切り、視字総監の力を軽蔑し、引きこもっている。

かれに興味深い論壇を与えていた、N・R・F誌の懇願にもかかわらず、アランは、自己の思想の自由をたいしてわずかな拘束でも感じるやいなや、新進、気鋭の作家の中心であるガリマール社との友好関係をま

つたく断ち切っている。このとき、リーブル・プロボ誌がかれにこの自由を与え、それによってかれは自分のイデーを展開することができるのである。(しかしながら、アランを聖人としてはならない。ガリマル社はかれを非難している。すなわちわれわれはあなたにこの自由を与えていた、云々と。そしてそのつぎの年、N・R・F誌のラベルがリーブル・プロボ誌のうえに印刷されることになる。しかし、それは続かない)。

この非妥協性は途轍もない傲慢であると説明されるかもしれない。すなわちひどい社交嫌いから、かれはその世界の規則にしたがうことができなかつたのであらうと。現実において、それは考えるための絶対条件であつたのだ。その思想が何であらうと、拘束するきずなを断ち切ること。

しかしながら、かれを養う職が必要であつた。よろしい、しかし主要な目的に向かつた職、すなわち自由に考えられることが――。

「それはまだ青すぎる」といわれるかもしれない。とんでもない。すでにエコール・ノルマル(高等師範学校)を出たとき、かれはどんな仕方でも自分を売ることができたであらう。たとえばティンヤルナンによつて認められること――アランはかれらの申し出を突っぱねた。後に、かれの名声がその周囲の人たちのあいだで高まつたとき、かれに強い期待を抱いていた人たち、モール・ランブラン夫人、モンドール博士、ヨーロッパ誌などを、アランは魅惑することができたであらう。アランは自分を売る危険にたいしていつも自分を守っている。かれはまったく欠けている、真の哲学者ではない、かれの名声は限られたもので、外国では知られていない、といわれるかもしれない。反対に、かれの深い偉大さは、いつも拒否したことであるのを知ることができる。(この偉大さは現実の世界とはきわめて異質なものだから、それがほんとうに知られるためにはまだ少し待たねばならぬだらう！)

## 第二の結論

思想の自由を守るため、拘束される危険からまぬがれるため、アランはいくつかの絶対的規則を自己に課してそれをいつも実践した。すなわち独断論や体系を拒否すること、そして教育においては、生徒の前でそのたびに新しく考えようと欲すること。かれは自分の思想がしばしば探求がたいような印象を与えた。生徒たちに「示された」思想は、また自己自身に示されたものである。「精神と情念に関する八十一章」は例外である。これはかれの作品のなかで教科書と似た、ただ一つのものであり、戦時中、生きて帰ることのなかった場合のため、一種の遺書として書かれたものであった。この「哲学論」(同じ書物の別名)については、かれは後に好きではないといっていた。戦時中に書かれた、もう一つの例外は「美術論」である。

しかしかれの講義の内容は、一つの体系をつくったり、かつての思想を繰り返すものではけつしてなかった。絶えず問題を問わんとしたのである。かれは学校の慣習を破って、哲学者として同時にバルザックを選び、あるいは『イーリアス』を選び、生徒の「トポ」(自由作文)をやり、黒板の断章をコメント(註)している。これによってアランのクラスはユニークなものとなった。かれのすべての生徒がそれを思い出している。かれはその場で再び発見し、全体的自由を通して完結した授業をするに至った。こうして、たとえば、絶えず思想を尊重することを教えたのである。

さらにまた作家として、かれは毎日一つのプロポを書くという、厳しい規則を自らに課している。すぐれた教師として、確実な自己の哲学者として、かれは音楽家のように、自らにこの訓練を要請している。自己自身にたいする訓練であり、また、他者にたいする訓練である。始め政治的であった(プロポは最初、政治新聞を支持するために書かれた)この思想を、かれは、その深い分析力によって展開しようとしている。しかもそれを一般読者の水準に維持しながら——。日常的なこと、生活から取られた具体的な例、現実の出来事から出発し、そこに哲学的本質的概念を、それなりに明確に導入すること。これはまれな賭けである。この思想の一つの例が有名な「ライオン一世」である。そこではアランは、自己をでるだけ唯物論者として

示している。真理を正面から見る勇気を主張している。すなわち人間存在が依存している物質的必然、リアルな条件を見る勇氣——。すべての社会学がこの思想と結ばれている。世界はわれわれの觀念にしたがうものではない。

他方において、段々「プロポ」のなかに、アランはかれの法則、「思想を固定化しない」の適用であるこの賭けを容れている。人びとを啓発することが問題である。しかし大事なことは、かれらに答えを与えることではない。かれらを考えさせることである。したがって、かれらを揺り動かすこと、かれらがテキストに縛られないようにすること。段々、しかも冒頭から、かれは、まったく脈絡なしに論じている主題を、他の主題から、他の觀念から、他の關係から切り離している。それは読者を揺り動かすため、そしておそらく自身自身を揺り動かすためである。切れ切れのプロポ、それはすべてのものがすべてのものの中にあり、思想が全体的なものであることを思い出すためである。そこから窮極的結論を期待する者はいつも満たされない。たくさんのプロポが未完であり、重要な觀念に貫かれている。

このようなまったくの鷹揚さを、かれはその作品のなかで維持したのである。人は皆自ずと、空気を吸うように、考えることができると思つている。人は皆判断をくだすことができる、個人的な意見をもつことができると思つている。アランはあなたがたを、もつとも単純なテーマについてもつとも困難な問題のなかに引きこむ。どんな種類の哲学的な特殊用語も禁じ(もう一つの賭け)、万人のことをばを用い、驚愕させるのである。万人のことをばを用いながら、かれは、だれよりも以上に難解である。だから人々は怒るのである。この困難な、いらだちさえも与える方法は、ほんとうの方法である。すなわち絶えず揺り動かすこと。それに打ち勝つことによつて、いくつかの誤りがなくなり、思想が啓発することを知るのである。

しかし、これは勇氣を含んでいる。作者の自己愛をすべて棄てる決意を——。(この勇氣については、アランは「カッコよく見える」——目立つ——)のを知っているだけに、そして容易に才能の誘惑に陥るだけに一層大きなものである。)かれの作品はいら立つような反復で一杯のように見える。かれはいつも同じことを繰



りかえしているが、それはけつして同じものではない。

進歩することは変化することではない。同じ関係を再考することであり、絶えず確かめてみることである。いつもいつも再考すること、そしてけつして「終わった」といわないこと。そこからかれは把握できない思想に走つた危険がある。なぜならば、それはあまりに散漫であるから。もしかれを知りたいと思うなら、かれの何を讀むべきか。アランを讀み始めるには、まず、たくさんのプロボを讀むべきであろう。思想は労働を強いる。

行動のなかで考えよというこの命令は、かれに他の恐ろしい諸規則を課した。けつして修正しないこと、一気呵成に、削除せずに書き上げること。たしかに、かれの作品は修正したら、削除したら、よくなったであろう。さらにまた、ぞつとするような方法、毎日、その気になつてもならなくても書くこと。自己愛にたいする一つのあかし。傲慢なのか、謙遜なのか？かれはその思想をけつして窮極的なものとして示していない。かれの偉大な作品はすべて、この同じ法則にしたがつているのだ。早く書き上げること、これはしんどい意志の力を想定する。毎朝書くこと。そしてこのような忍耐にもかかわらず、かれの作品はいつも難解な思想である（『思想と年齢』参照）。脈絡を失つてしまうのである。即興の感じがする「神々」についても同様である。かれの最後の作品、「わが思索のあと」についてはさらに顕著である。この作品は、「思想」へのまつたき折りである「神々」の「序章」として書かれたものであるが、「神々」の後に書かれている。「神々」というのは「精神」である。真の神と想像の神とを混合しないようにしなければならない。後者は憑かれたものの神、子どもの神である。十字架にかけられた精神を見出すこと。「わが思索のあと」のなかで、アランは、どうしてそこに至つたかを物語つている。

精神は造り出さねばならない。もつとも困難な、本質的観念である。問題は考えることはやさしいと思ひ込ませて、読者を欺くことではない。読者を尊敬することは、かれらに一つの対象として使用できる、まったく出来上がった思想を与えることではない。これを拒否することから、アランの著作は着想を得ているの

である。作家の思わせぶりなど問題ではない。それはかれの思想の根底そのものである。読者に、自分のために考えるのではないこと、重要なのはそこに立ちつくすことであることを思い出させる。与えられたテキストは、読者にとつて、仕事の機会となるはずである。ほんとうの問題は感動と思想を、すなわち人間の全体と一緒に容れることである。アランのテキストのなかには、いつも人間がすべてしているのである。

### 第三の結論

そこからつぎのことが想定される。読者は思想を連続的創造と見ることに同意すること。したがって、思想は自由であることを理解し承認すること。ここにおいて二元論が明確となる。なぜというに、物質的世界の秩序とは別の秩序が、「自由」の隠された領域であるから。

アランのもつとも個人的な教え。自由は、科学のなかのみならず知覚のなかに見られるような決定論と本質的に矛盾する。カント的なカテゴリーにたいする厳密な服従である。問題は各人にとつて、この乗り越えがたい矛盾を超えることである。

自由というのは、世界のどこにも見出されない。さもなければ、もはや決定論はないであろう。自由は人間がそれを用いることによって存在するのであって、それ以外に自由はない。自由であること、より正確には考えること、自分が判断をくだすこと、この上もなく自由であること、意識すること、それは自分が自由であると思うことである。この上もなく単純な定式によれば、もし人があらかじめその力をもっていないとしたら、どうして自由に行動できるのか。また何であれ、どうして変えようとするのか。

自由のリアルな使用は、成功するという考えなしに試みることに在る。そこからわれわれは、アランのもう一つの独創性に至る。精神は一つの実在であつて、創作ではないということ、それを明らかなものとして措定すること。これは精神を変わらぬ経験の場、すなわち自己自身のうちに求めることである。

精神が見出される、ただ一つの場所。それは頭のなかではなく、行為においてである。もし思想がほんと

うに人間そのものであるならば、思想を知るただ一つの方法は、自己自身に問うこと、自分が誤りを犯さないように努力することである。考えることによつて……精神をあかしすること。精神はそこにしかない。それは他者のなかに想定される。人は皆、万物の支配者であり、世界の中心である。精神にかんして、根源的認識は、精神は自由によつて支えられていること、考えるためには考えようとせねばならないことである。眼ざめようとすること。たしかに人間は、すべての身体と同じように厳密に決定された、動物的身体である。この物質の塊は物質のすべてから出来上がったものであるが、そこから、考える意志、事物を問う意志によつて、自己を精神として発見することができる。

意志は、分割できない各個人にまつたく依存している。では、何が分割できないか。「精神」のみ。人間のいつさいの条件、その運命は、精神は自分に役立つと同時に、自分を守る身体で満足しなければならぬことである。身体の活用という膨大な仕事。これは最初、教育によつて、したがつて人間性によつてしかかなされないものである。

精神のただ一つの場所である、個人。それは人間性を要請する。身体は精神が示す目的にしたがつて活用する機械とみなされるはずである。精神だけが時間を、すなわち過去、現在、未来を考えることができるからである。まだ自然のなかにないものの観念を表象できるただ一つのものである。教育は人間の身体なる機械を、われわれに役立つように、われわれを損なわないように変えようとする。

考えるという、われわれのいつさいの自由は、それを内容としている。すなわち、もちろん言語の習得。また外国語の習得、基本知識の習得。すべての多種多様な習得。あなたは何をなしたかによつて決まるのである。

自己を受容するのではなく自己を造り出す、ただ一つの存在である、人間。このような人間の状況は、驚くほど人を奮いたたせるものである。人間はその生涯のなかで、いつも何かを造り出さねばならない。いつも、何かがわれわれに依存している。人間のただ一つの、ほんとうの目的は、人間となることである。ひと

は人間ではない、人間となるのである。このような自己変革は、人間にとつて尽きざる関心事である。死は？ ずばらしい刺激である。すなわち「急ぎなさい」と、死はわれわれを促す。いつも何かをしなければならぬ というのは幸いである。何のためによいか。人間となるために。果てしなき自己創造の力。いつも人は永遠なるものにあずかつている。人間はこの上なき絶対者であり、世界はかれの廻りに組織される。

反論——「神を排除するのではないか。人間を自己自身に還元し、かれをすぐれた秩序から切り離して、神とするのではないか。したがって、神を損ねるのではないか」。

単純な答え——「この創造の営みというのは、発展すればするほど、ますます要請するのである」。

この営みは、充足感や充溢、成就の感情を与えるどころか、まったく反対に、不足感を与えるのである。われわれを自身のうえに釘づけにするどころか、この営みのみが、われわれ自身から根こぎにするのである。人間精神といい、絶対精神といい、神というが、同じことを三度いつているのである。それは存在しないことではなく、造り出さねばならぬことである。

### 最後の結論

最後の結論、おそらくもつともオリジナルな結論。すなわち人間的状況のままでふくれつ面をしたり、その不条理を歎くのではなく、いつも造り出さねばならないことが一杯あることを、途轍もない営みをよるこぶことである。けつして終わることのない感情がわれわれを押しつぶすけれども、われわれの驚嘆をさそう天才の仕事である。各瞬間において世界を再創造すること、他者を考えさせる仕事に精根尽きること、これが、アランがその生涯の最後までやったことである。最後の三作品、『海辺の語らい』（一九三三年）『わが思索のあと』（一九三四年）、『神々』（一九三五年）において、かれは驚くべき統合の努力をして、ただ一つのことさらに帰している。考えること、そして他者が考えるように助けること、しかし、ことにそれをいわぬこと。思想は媚びる唱婦のごとく与えてはならない。近い者たちは、かれがそれにまったく精根尽きたこと

を知っている。取り組んでいた第四の作品、『このころの冒険』は完成されなかった。アランは数週間後、発作で倒れた。

「わが思索のあと」のある箇所で、アランは、この本を奇妙に思っている人たちに、どうして、どんなごまかしもなく考えるに至ったかを理解させるために書いている、といっている。そこには真理にたいする信仰がある。すなわち真理は、もつとも眞実なるもの、もつとも単純なるもの、いつも在るといふ意味でもつとも確実なものなかに、いつももつとも近くに求めねばならない。自己自身を間違えないように、永遠の真理として措定された、科学的真理をモデルとして取ること。けれども、思想のもつこの単純さ、比類なき明晰さによく理解することができない。なぜならば、人は真理を恐れるからである。もし思想の起源をとらえようとするならば、なぜ、神話のなか、呪術のなか、未生前の存在についての擬似科学的ないしは心理学的想定などのなかに求めるのか。どうして魂は身体の中に入るのか。アランはまったく単純に、人がよく知っている、普遍的な子どもの時代に強い関心をもっている。なぜというに、人は皆、「大人になる前には子ども」であるから。そこにかれば、「樂園」というものを発見している。明白な普遍的現実である。万人のもつ経験である。なぜというに、もつとも貧しい子どももさえも、もつとも恵まれないものでも、支えられ、育てられ、助けられることから始まるからである。なぜならば、すべての人が天才たちに依っていることを経験するからである。この天才たちから、いつさいの可能な善や悪が出てくるのであり、かれらに対してわれわれは、祈りによる以外にはどんな力もないのである。ある時は同意し、ある時は拒否する天才たち。その善意は予知できない。それはわれわれのうちに決定的印象が刻まれる年齢に万人がもつ社会の眞の経験である。眞の経験、しかも誤った経験。なぜならば、世界は子ども知らない別のものであるから。努力によつて事物が得られる、仕事の世界。子どもとなるのではなく、在るように在る世界を非難するのではなく、あるいはこの世界に祈りをささげるのではなく、人間を信じて、その創造力を信じて、人間を支えるために造られた世界のなかにあるこの人間の天与の才を信じていることが問題である。これが「形而上学の嚴密な

領域」である。すぐに失われ、いつも克服すべき精神の王座である。解決できない問いを出すこと、世界を議論することは、幼稚な行為であり、精神の敗北、考えるとは何かを知らぬ子ども**の**ばかげた言行である。

アランは能うかぎり唯物論者でありリアリストである。人間に与えられた生は一つの特権であり、生を問うことは愚かなことである。人間を在るがまま、プラトンが描いたように、万人のなかに在るように、その三つの部分、頭と胸と腹をもって、そして皮袋に隠されたはたらきとともに、よく知らねばならない。いつさいの人間の冒険はこの三つの部分のあいだのかかわりから出てきている。真の人間は、頭が上に、腹が下にある。その反対は否定された人間である。不易の人間性——その偉大さと落とし穴、すべてのものに對する情念、そして恐怖と勇氣のあいだ、驚嘆と嫉妬のあいだ、贅沢と飽くなき欲望のあいだ、エゴイズムと自己献身のあいだの永遠の關係。

不易であること、これは洞窟の時代と同じである。しかしながらすべてのものにもつとも適用できるもの、変化の可能性がもつとも高いものである。模倣、模態、法則、実践、いつさいのものが氣の遠くなるほど変わらるのである。開始しないように注意！人間は自己をすべてのものに造りかえる。正しい旧い原理に執着するのが賢明である。もし人間が法則なしで生きられたら、人はそうするだろう。だが、破壊するだろう。それがどこまで行くかわからない。何ひとつ、まったく確実ではない。これは進歩の不確かさ、すなわち野性と混沌がついも在ることを説明する絶望的原理である。しかしまた、希望を与える原理でもある。なぜならば、ほんのわずかな変化が状況を回復させることができるからである。こうして小さな変化が戦争を止めさせることができる。人間はパニユルゴスの羊（付和雷同の徒）であり、自己自身の破壊に至るまでそうであろう。指導すべき精神は、自らを滅ぼし、自己を嘲笑するであろう。存在するか存在しないか、精神は、自己とすべてのものを選ばなければならないのである。

[註]

(註一) シモーヌ・ペルトマンによれば、アランは、生徒たちが黒板に書いた文学作品の断章のコメントから授業を始めた。

(\*) *Hommage à Alain, Propos de Madame Alexandre recueillis par Madame Flamand, Association des Amis du Musée Alain, Bulletin, n° 4, octobre 1981, pp. 21-27.*

(\*\*\*) この語録を翻訳し、紀要に載せることを快諾してくれたフラマン女史に謝意を表したい。また、訳者にはじめてこの文献を紹介し、誤植まで訂正してくれたシモーヌ・ペルトマン女史にも心から感謝したい。